

ドイツの図書室より



中山 文（教育推進センター）

『森鷗外：1862-1922（ちくま日本文学全集） ～高瀬舟～』

森鷗外著 / 筑摩書房

小学四年生の夏休み、三冊の本を読んだ。一冊目は、フランス皇帝となったナポレオン・ボナパルト（1769-1821）の伝記。彼が生まれたイタリア半島の西に位置するフランス領の「コルシカ島」をはじめ、スイス、オーストリアと、その周辺国も含めたヨーロッパ諸国の地理に関心を持つきっかけとなった一冊である。

二冊目はアンネ・フランク（1929-1945）の物語。第二次世界大戦の最中、ナチス・ドイツによるユダヤ人迫害から逃れるため、オランダのアムステルダムで二年もの間を過ごしたユダヤ人家族の物語である。ナポレオンの伝記とは異なり難しい漢字も多かったため、食後に数ページずつ、母親に読んでもらった記憶がある。

これら二冊はともに、ドイツ・フランクフルトの小さな図書室から借りてきた本である。その年、私はライン川沿いの町マインツ（活版印刷技術を発明したグーテンベルクの生誕地である。）に住んでいた。普段はドイツ人学校に通い、週末のみ、フランクフルトにある補習校に通っていたが、図書室から時折本を借りては読んでいた。

これら二冊を読み終えた頃、関連する国々を訪れる機会に恵まれた。フランスではエッフェル塔に凱旋門に、初めて目にする重厚なヨーロッパ建築を見上げ、ナポレオンが生きた時代を思い浮かべた。オランダでは、アンネ・フランクの隠れ家を訪れたが、書棚の後ろに隠された急な階段の先にあった、ただただ平和を祈り、皆で息をひそめ生活したであろう、その狭い空間でアンネたちが過ごした日々を想像した。これほどまでの過酷な人生を強いられることが、この世の中で実際に起こり得ることへの恐怖感で、しばらくの間、現実感が持てないような感覚に陥った。想像力の翼を広げれば「読書」によってどこへでも、いつの時代にも旅することはできるが、実際その地に立って見て感じることもまた、得難い経験である。

最後の一冊は、読書感想文用に読んだ、森鷗外（1862-1922）の『高瀬舟』である。ドイツへの留学経験もある鷗外の作品としては、『舞姫』『山椒大夫』などがよく知られるが、私はなぜか『高瀬舟』に強くひかれた。罪人が遠島へと送られる高瀬川を舞台に、その護送人と、弟殺しの罪に問われた喜助の会話が中心となった、「安楽死」がテーマとなる一冊である。具体的にどのような感想文に仕上げたかは残念ながら記憶にないが、収容所で最期を迎えたアンネの死とともに、「死」について考えた夏休みであった。数年前、桜の季節に訪れた高瀬川の川幅は、大人になった私には思いのほか規模が小さく感じられた。

いつ、どのような心境でその本を読むかによって、内容の理解も解釈も変わりゆくものである。さらには読み手の個人的体験にさえも大きく左右される「読解力」は、AI化が進む時代に何をなすべきであろうか。活版印刷の発明により、人は長きにわたり「紙面」を通して思索を深めてきた。初めてその本を手にした時の感触を確かめながら、久しぶりにこれらの本を読みたいと思う。